



NO.

いちよう

発行所

待乳山 本龍院

〒111 東京都台東区浅草7-4-1

-0032 TEL. 03(3874)2030

FAX. 03(3874)5280

解説 礼拝作法（おつとめのしかた）⑤

住職 平田真純

当山ご信徒が、待乳山の経本「大聖歓喜天禮拝作法」でおつとめする際の作法や意味をシリーズで解説いたします。

③三帰

弟子某甲 盡未來際

帰依仏 帰依法 帰依僧

「仏弟子〇〇は 未来永劫

仏（仏さま、あるいは聖天さま）に帰依いたします

法（仏の御教え、あるいは聖天さまのお導き）に帰依いたします

僧（仏法を伝える人々、あるいは聖天さまのお導きを伝える人々）に帰依いたします

合掌で三回称えます。

「帰依」という言葉は、信仰においてよく使われま

すが、今の時代の感覚からは、「心から信頼する」というニュアンスがふさわしいかと思えます。

④三竟

弟子某甲 盡未來際

帰依仏竟 帰依法竟 帰依僧竟

合掌で三回称えます。

前項の三帰に「竟」の字が加えられています。「竟」には、「おわる」とか「極める」とか「ついに」等々の意味がありますが、仏法僧に帰依するという不退転の境地を誓う言葉と捉えられたらいかがでしょうか。

仏法僧の三宝に帰依し、信頼を置くことは、仏道に入る第一歩とされ、出家在家にかかわらず、仏教徒の基本的条件とされています。待乳山の信徒の皆様も、まず聖天さまがいらつしやることを確信し、そして聖天さまのお導きを心より信頼し、よこしまな信仰に陥らぬように常に注意することが大切でしょう。

待乳山だより

江戸時代の聖天靈驗記

神仏に祈願し、不思議な縁によって利益を頂くことを靈驗と呼びます。体験した靈驗を記載した文献を靈驗記、あるいは利生記と呼びます。靈驗記は平安時代の頃から各地で伝承された話を集成する形で成立し、信仰を集める助けとなりました。

さて、当山の本尊様でもある大聖歡喜天、聖天様の靈驗記となりますと、かなり数は少ないのですが、庶民の生活に関わるものが多いようです。

今回は、昭和四十二年発行、大井聖天の藤元真靖氏の編著『歡喜天利生記』を引用して、安政二年の『大聖歡喜天靈驗経和訓図会』に書かれた江戸時代の聖天様の靈驗談をご紹介します。

文政末、京と丹波の国境いを聖天信者の魚屋が仕入れを終えて通っていました。魚屋がふと振り返って



を見ると、一匹の狼が荷を漁っています。魚屋は腰を抜かして命乞いした後、聖天様の真言を唱えながら狼に塩魚を与えました。すると狼は魚屋を案内するかのよう先頭を歩き、魚屋は無事故郷に帰ることができました。この出来事があったから、魚屋はますます信

仰熱心になり、妻子と共に毎日聖天堂へお参りするようになりました。その後も魚屋が仕入れの帰りに街道を行くと、不思議なことに必ず狼が現れます。そして、魚屋が魚をあげると峠の出口まで案内してくるようになったのです。ある夏の日、魚屋が仕入れを終えて歩いていると狼が一生懸命裾を引っ張ってきます。魚屋が狼の様子に戸惑っていると、狼は男に飛びつき突き飛ばしました。すると、突然目の前をすさまじい光と轟音が轟き、魚屋は気を失いました。魚屋が気がつくとき、落雷で目の前の巨木が真つ二つになり、真つ黒に燃え尽きていました。狼は男の横で倒れています。どうやら突き飛ばした衝撃で前足を折ったようでした。魚屋は自分を救ってくれた狼を故郷に連れて帰り、手厚く看病します。

養生して元気になった狼は、たくさん魚を貰って山に帰っていききました。その後、狼は現れなくなりしましたが、ある時魚屋がお参りする聖天堂の老僧が聖天像を見ると、手の部分が折れていました。魚屋は一家揃って信仰を続けたいそう繁盛したそうです。



動物が人間に恩を返す話は、各地に様々な形で伝わっているの

ですが、聖天様が狼に変化して信者を助けたというお話は、こうした靈驗談の中でも特にユニークなものとなっています。



お宮参り

六月七日(日)、西林泰佑くん、六月二十八日(日)、卯月順ちゃんのお宮参りを行い、行者様よりご加護を授かりました。

健やかに成長されることをお祈りしております。

ご奉納

谷川桃代様より地藏堂の鰐口紐をご奉納頂きました。



行事報告

六月二十四日(水) 歡喜地藏様の前で地藏経を読誦し、供養致しました。

朝まいり会 七月度表彰者

長い間、朝まいり会を参加されている左記の方々に記念品を授与いたしました。(敬称略)

半年 土浦耕一 土浦明子 土浦由貴

一年 長門美也子 松村健三郎

二年 向島久美子 横山千秋

灯明講

八月二十日（木）午前十一時

講金 一、五〇〇円

八月二十日、灯明講大法要を執行いたします。

仏教では全ての苦しみの根源に、無明があると説いております。無明とは即ち、迷いを指します。智慧を得ることでこの無明を照らし、人生の苦を消していくことがお釈迦様の説いた教えであります。

お釈迦様が入滅される前に説いた最後の教えに「自灯明法灯明」というものがあります。これは『お釈迦様がなくなった後も、自分と法を道標にして生きなさい』という教えです。弟子たち一人一人が智慧に目覚め、周囲を照らす灯明となることを最後に諭したのです。

このように仏教において、灯明は私たち衆生を悟りに導く光の象徴として大事にされました。炎は不浄を燃やすことで周囲を清め、煩惱の暗闇を照らします。ロウソクを供えることには、苦しみを消滅させるために、智慧の光を明るく照らすという意味があるのです。

暗い中、ロウソクの明かりを眺めていると、心が静かになっていくのがわかると思います。ロウソクを灯すことは、仏と向き合うための境地を整える効果があるのです。

灯明講はこうした灯明への功德に感謝を捧げるための法要でもあります。灯明の明かりを通して、皆様の家内安全、諸願成就をご祈願いたしますので、ぜひご参加ください。



名刹 待乳山聖天と周辺地域

浮世絵展

開催決定

平成二十七年 入場無料

九月二十一日、十月四日

本院広間特設会場にて



歌川広重画

八月行事予定

灯明講

八月二十日(木)

午前十一時

講金

一、五〇〇円也

仏の智火をあらわす灯明を供養し、各々の身体健全、家内安全を祈願します。

朝まいり会

八月一日〜七日

午前八時から八時半

会費

月 五〇〇円也

都合のよい日に、ご参加くださっても結構です。最終日には、読誦終了後に食事作法を行います。

日曜勤行

八月九日(日)

午前九時

参加費

無料

初心の方も気軽にご参加いただけるおつとめの会です。

写経の会

八月九日(日)

午前十時/午後二時

会費

五〇〇円也

心を落ち着かせて写経することで、日常を離れ、自分を見つめ直しましよう。

夜間開堂法話とおつとめ

八月二十二日(土)

午後六時〜八時

参加費

無料

今月は本堂にて、午後七時よりおつとめと法話を行います。

合同大般若法要

八月二十五日(火)

午前十一時

法要料

五、〇〇〇円也

心願が成就し、より一層の御加護を頂くために、皆さんとご一緒に仕上げする御礼の法要です。

九月の行事

開山会香湯加持会

九月二十日(日)

午前十一時

講金

三、〇〇〇円也

浮世絵展

九月二十一日(月)〜十月四日(日)

入場 無料

ご祈祷のご案内

聖天様独特の供養法である浴油供は、密教の中で最も深秘の法とされています。この供養法は聖天様のお力がより一層高められ、私どもが不可能と思われるような願い事でも、孫天様の不思議方便のお働きを得て、必ず成就させて頂けるのであります。

当山ではこの浴油祈禱を、毎朝開堂と同時に厳修しております。寺務所にて受け付けておりますので、お名前とお願いの内容、祈禱期間をお伝え下さい。

またご遠方の方やお急ぎの方は、お電話やお手紙でも受け付けております。どうぞお申込みください。

祈禱料

別座祈禱 壹万円以上(一週間)

浴油祈禱 三千五百円以上(一週間)

華水供 五百円/一日(お札は出ません)